

早生温州の結果母枝発生促進のための不作年における枝処理法

[要約] 早生温州の隔年結果是正対策として、不作年に早期(6月～10月)から、強めの前年枝より発生した新しょうをせん除すると、翌年の着果過多年においても適正着果が確保され収量を減らすことなく、優良な結果母枝を発生させることができる。

長崎県果樹試験場・常緑果樹科

専門

栽培

対象

果樹類

分類

指導

平成11年度長崎県果樹試験場業務報告

[背景・ねらい]

早生温州にも隔年結果性が現れており安定生産技術の確立が望まれている。連年安定して結実をさせるためには、豊作年に優良結果母枝を多数発生させることが大切であり、そのための不作年の枝処理法について検討する。

[成果の内容・特徴]

- ① 枝の処理方法について、早期せん除区は、強めの前年枝からでた新しょうの除去を6月、8月、10月にせん除する。10月せん除区は、当年枝からでた夏秋しょうを10月に除去する。2月せん除は、当年枝からでた夏秋しょうを2月に除去する。
- ② せん除量は、早期せん除区が最も多く合計で11kgがせん除され、その内訳は6月が5.3kg、8月が5.3kg、10月が0.4kgである。(表2)
- ③ 翌年の母枝当たり着花数は、10月せん除区と2月せん除区にあまり差はなく、早期せん除区が最も少ない。特に母枝当たりの有葉花数が少ない。花葉比についても同様な傾向である。(表1)
- ④ 翌年の母枝当たりの新しょう発生数は、早期せん除区が最も多く、次いで10月せん除区で、2月せん除区は最も少ない。旧葉に対する葉芽の割合も同様な傾向である。(表1)
- ⑤ 1樹当たりの収量は、早期せん除区がやや多い。(表2)
- ⑥ 樹の上部と樹の下部では着花数並びに新しょう発生数に差はない。(表1)

[成果の活用面・留意点]

- ① 豊作年に新しょうの発生を促進させるためには、不作年の6月からの早期せん除が効果的であるが、その後に発生する夏枝処理を行わないと、結果枝となり次年には着花(果)するので8月の再処理が必要である。
- ② 6月からの早期せん除を行うと冬のせん定はひかえてよい。

[具体的データ]

表 1 枝のせん除方法が，着花数と新しょう発生数に及ぼす影響

(1999年5月10日調査)

処 理	枝径 (mm)	節間長 (cm)	着花数		新しょう数	花葉比	葉芽/旧葉	
			有葉花 (個/母枝)	直 花 (個/母枝)	葉芽 (本/母枝)			
早期せん除	上層	8.0	2.5	2.8	2.2	6.9	0.9	1.2
	下層	7.7	2.4	3.7	2.3	7.9	0.7	0.9
10月せん除	上層	7.6	2.7	8.0	5.1	2.4	1.7	0.3
	下層	7.9	2.3	6.8	1.1	3.4	1.2	0.5
2月せん除	上層	7.4	2.7	7.7	2.2	1.1	1.3	0.1
	下層	7.1	2.4	7.0	2.2	0.8	1.4	0.1

表 2 枝のせん除法の違いによる翌年の収量への影響 (1999年)

処 理 [*]	1 樹当たり せん除量	着花量 [†]	収量 (kg)	1 果平均重 (g)
早期せん除	11.0	3.0~4.0	133	110
10月せん除	4.9	4.0~4.5	117	119
2月せん除	4.5	4.0~4.5	110	113

^{*}：早期せん除は、強めの前年枝からでた新しょうを6月8月10月にせん除

[†]：達観で5段階評価（過多5，多4，中3，少2，過少1），5月5日調査

研究課題名 : カンキツの省力的早期育苗法と若齡樹高品質果安定生産技術の確立
 予算区分 : 県単
 研究期間 : 平成11年度（平成10～13年）
 研究担当者 : 古川 忠
 発表論文など : なし